第 18 回　これからの学術情報システム構築検討委員会　議事要旨

1. 日時：平成 29 年 11 月 2 日（木）14：00～16：30

2. 場所：学術総合センター　20 階　ミーティングルーム

3. 出席者：

（委員）

小山　憲司　　中央大学 文学部 教授
相原　雪乃　　北海道大学附属図書館 管理課長
佐藤　初美　　東北大学附属図書館 情報管理課長
米澤　　誠　　京都大学附属図書館 事務部長
粟谷　禎子　　公立はこだて未来大学情報ライブラリー
原　　修　　立教大学図書館 利用支援課 課長
近藤　茂生　　立命館大学図書館 学術情報部 次長
佐藤　義則　　東北学院大学 文学部 教授
大向　一輝　　国立情報学研究所 コンテンツ科学系 准教授
小野　　亘　　国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課長

（欠席）

呑海　沙織　　筑波大学 図書館情報メディア系 教授
吉田　幸苗　　国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 副課長

（陪席）

飯野　勝則　　佛教大学図書館 専門員
三角　太郎　　筑波大学 学術情報部 アカデミックサポート課長
江川　和子　　国立情報学研究所 学術基盤推進部 次長

（事務局）

片岡　　真　　国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課
　　学術コンテンツ整備チーム係長（CiNii/新 CAT 担当）
阪口　幸治　　国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課
　　学術コンテンツ整備チーム係長（CAT/ILL 担当）
古橋　英枝　　国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課
　　学術コンテンツ整備チーム係員（CAT/ILL 担当）

＜配付資料＞
委員名簿
1.　第 17 回これからの学術情報システム構築検討委員会議事要旨（案）
2.　「これからの学術情報システムに関する意見交換会」中間報告
3-1.　電子リソースデータ共有作業部会（平成 29 年度活動報告）
3-2.　ノルウェーの図書館コンソーシアム BIBSYS における Alma 導入に関する調査
3-3.　IGeLU 2017 参加報告
4.　NACSIS-CAT 検討作業部会（平成 29 年度活動報告）
5.　これからの学術情報システムの在り方について（改訂版）（たたき台）

参考資料
1.　「これからの学術情報システムに関する意見交換会」アンケートフォーム
2.　これからの学術情報システムの在り方について

4.　議事：

（1）前回（第 17 回）委員会の議事要旨確認
メール審議を経て 9/5 付で確定したため、委員会内での確認は割愛した。

（2）「これからの学術情報システムに関する意見交換会」中間報告（報告）
事務局より、資料 2 に基づいて報告があった。

質疑・意見交換は次のとおりである。

- まだ 2 会場しか実施していないが、現時点ではいくつか懸念は示されたものの、方針に対する極端な反対意見等はなかったと捉えている。
- 参加者によってはまだまだ理解が深まっていない部分もあるのではないか。
  - 繰り返し話をしていくことが重要だと考えている。
- 意見交換会は大学図書館の正規職員だけが参加対象となるのか。実際の現場で勤務する委託職員等も参加可能なのか。
  - 図書館システムベンダーについては、別途機会を設ける旨断り書きをしているが、その他は特に制限は設けていない。

（3）電子リソースデータ共有作業部会活動報告（報告）
飯野電子リソースデータ共有作業部会主査より資料 3-1 について、事務局より資料 3-2 及び 3-3 について報告があった。

質疑・意見交換は次のとおりである。

[BIBSYS および IGeLU の調査報告について]

- BIBSYS が Alma を導入する前、各図書館にはローカルシステムが別途存在していたのか。
  - ローカルシステムは従来から存在せず、閲覧業務等も含めて BIBSYS という単体システムで実施されていた。
- BIBSYS はどのような予算体系で運営されており、その中でどのように Alma を運用しているのか。
  - コンソーシアム参加機関による会費が予算の大半を占めているが、そのうちのどの程度を Alma/Primo に割り当てているのかは不明である。
    - BIBSYS が提供するサービスが Alma/Primo 以外にも存在するので、そのうちのどれを利用するのかによって参加機関の会費が決まっている。
  - 例えば CAT/ILL で想定すると、参加館が図書館システムに割いている予算を Alma の利用料に振り替えるようなイメージで、新たな支出が発生するものではないと理解している。
- 特定のシステムにコミュニティ全体が移行していくことに対する不安や、冗長性が失われることに対する懸念等について調査してきた内容はあるか。
  - IGeLU では、単館でのシステム導入が予算的にも人的リソース的にも難しくなってきている状況の中で他に選択肢がなかった、という話をよく耳にした。このため、逆に Alma 移行後に他の選択肢が出てきた場合に図書館が自由にデータ抽出・移行が可能かどうかを調査し、問題ないことを確認している。

[LSP の導入可能性について]

- 次回の委員会で提示される Alma 検証の報告書は、例えば Alma のような LSP を日本で導入する場合の課題や導入に向けての提言、といった内容も含まれるのか。
  - 日本での適用可能性も含めた報告書にしたいと考えているが、システム以外の事項を含む提言に関しては、海外の事例等からも、作業部会からではなく本委員会のような大きなレベルでの判断が必要なのではないかと感じている。
  - 仮に何らかの提言について検討を進める場合、現在進めている NACSIS-CAT/ILL の検討も含めて整理されていくことになるのか。
    - 現在の CAT/ILL の検討は、国内外の印刷体のリソースをより使いやすく、かつ、図書館員の業務をより簡便にした上で、よりよいサービスを提供していくためのバージョンアップ、という位置づけと考えている。そこが達成されると、Alma のようなサービスに移行する可能性も出てくるのではないか。大きな変更を初めから意図したものではなく、変更しやすい環境を作り出し、選択肢を増やしていきたい。
- 今後の可能性として、Alma 以外の選択肢はあるのか。

- あくまでも電子リソースデータ共有作業部会が検討しているのは電子リソースに関する部分であり、その範疇において昨年度は 360RMC を、今年度は Alma の検証を実施している状況である。OCLC などに他製品があることは承知しているが、検証に係る予算等の問題もあり、作業部会としては選択肢となりうるかの検証はできていない。
- LSP の検証について、NACSIS-CAT 検討作業部会では印刷体に関してはまったく検討していない状況であり、電子情報資源・印刷体両方を含めた導入は慎重に検討を進めるべきである。
- LSP の導入方法はいくつかのパターンが想定される。BIBSYS のように国のレベルで導入しているケースもあれば、米国のように OCLC が国レベルのデータベースの役割をしており、さらにその下に地域レベルでコンソーシアムを組んで共同導入しているケースもある。日本におけるコンソーシアム形成の経験値は、JUSTICE のように大学から職員を派遣している形式であり、運営費や人的リソースについて、BIBSYS のような形式を目指すのか等、最終目標も含めて整理が必要である。また、システムに関しては Alma ありきの検討ではなく、その他の製品も含めて検討すべきである。
  - 参考までに、現在 NII は OCLC から CBS という製品を NACSIS-CAT システムに替わるものとして提案されており、今後、予算等諸条件が整えば検証したいと考えている。

（4）NACSIS-CAT 検討作業部会活動報告（報告）

三角 NACSIS-CAT 検討作業部会主査より、資料 4 に基づいて報告があった。

質疑・意見交換は次のとおりである。

- 現在 NII では、旧スキーマバージョンの図書館システムを使用している、または保守に入っていない等の理由により、今回の変更に対応できない図書館がどの程度存在するのか確認を進めている。特に ILL において、こういった参加館が業務を維持するために、BOOK へのシステム登録時に登録対象の選別処理を適用することで、複数書誌の乱立状況を回避し、依頼時の混乱を避ける方策を NII から提案したところである。ただし、新規書誌作成基準に則って発生する同一書誌の名寄せについては、別途必要だと考えている。
  - 並立書誌が 3 つか 1 つか、という話で、ILL 等の利用時にもメリットがあるのであれば特に変更に問題はないのではないか。
  - 作業部会としては登録時に処理を加えることには問題は感じていないが、これまでの前提や、そのためのルールについて作業の追加と検討時間が必要になるのではないかと考えている。
- 運用ガイドラインを出すタイミングについては、委員長・作業部会・事務局で相談し

た上で、委員会にはメールで報告させていただきたい。

- 階層構造をなくすことによって外部 MARC との親和性は高まると考えられるが、細かい点については個別に関係機関と調整することを検討してもよいのではないか。

（5）これからの学術情報システムの在り方について（審議）

委員長より、資料 5 に基づいて内容について説明があった。

審議の結果、今回指摘のあった項目について再度検討した上で、次回改訂案を提出し、継続して議論することとなった。

審議にあたって行われた質疑・意見交換は次のとおりである。

- 背景に記されている電子情報資源に関する部分と印刷体に関する部分が、その先に向けてどのように位置づけられているのかを、再度検討して書き込む必要がある。
- 資料 5 の 3-②に記されている 2022 年以降の基盤整備には、各図書館で図書館システムを導入するモデルもあれば、いくつかの図書館が共同でシステム導入する、というモデルも考えられる。
  - 電子情報資源に関しては、2022 年まで待たずとも、少し先行して統合的な運用モデルを採用する可能性もあるのではないか。
- 図書館システムと ERMS の両方が存在しないとナショナル・レベルで統合されたナレッジベースを構築できないのか。例えば、現在の NACSIS-CAT は電子情報資源を登録するメリットが少ないから参加館はほとんど登録していない。登録することが全体のメリットになるという意識転換ができるのであれば、選択肢も異なってくる。コレクション形成に対して各館の政策的な判断を反映するためには、どのようなメタデータが必要で、そのためにはどのようなシステムが必要なのか、といった考え方が必要だと感じている。
  - その意味で、今回のたたき台にある「3. 進むべき方向性」と「4. 解決すべき課題」は逆なのではないか。
  - 修正する方向で検討する。
- 機関リポジトリやデジタルアーカイブのデータ等をどのように扱うべきなのか、という点も含めてナショナル・レベルのメタデータについて検討が必要である。
  - デジタルアーカイブのメタデータについては電子リソースの枠組みで検討されている一方で、従来、和漢古典籍の書誌データは NACSIS-CAT で扱ってきた。これらの枠組みをどのように変えていくか、RDA も含めて検討する必要があると思うが、現時点では議論できていない状況である。
  - NACSIS-CAT 作業部会は、現在 2020 年に向けたソフトランディングを念頭に検討を進めているため、CAT に対して他にやるべきことについては別の作業部会を設置することも含めて、検討する必要がある。
- 印刷体のワークフローについても、次の図書館システムの在り方も含めて見直しが

必要ではないか。

- 元々図書館業務のワークフローを変えるきっかけの一つとして、NACSIS-CAT/ILL の再構築に関する検討を始めた。
- 一つの将来像として、欧米ではすでに実現されている、発注時にメタデータが総合目録に登録され、現物は装備された状態で納品され、支払伝票も電子的にやり取りされる、というフローが考えられる。
  - このようなワークフローへの対応も、これからのメタデータ作成、さらにはメタデータの運用基盤の整備において検討していくべきであると考えている。

- NACSIS-CAT/ILL を維持・発展させるためには、参加館のような、これまで存在していたコミュニティを活性化していく必要がある。
  - NACSIS-CAT には海外機関も参加しており、今後はコミュニティの範囲についても見直しが必要になる。また、図書館システムの導入について、コミュニティ全体で取り組むのか、サブコミュニティを形成するのか等の検討も必要である。
- 平成 27（2015）年の 5 月に出した文書は、これまでの長きに渡る取り組みとその成果に立脚しつつ、現在の課題を解決するための方向性について議論を重ねて示したものであった。他方、今回の文書は、最近の取り組みと今後の活動に重点が置かれ、現時点では視点が少し異なっている点が気になっている。改訂版として出すのであれば、前回の文書との整合性をとらなければならない。

以上